

## 未知の世界へ

——帰国子女クラスでの古典学習における導入の効果——

政岡依子

### 一、帰国子女クラスを担当して

平成元年四月より中学一年の帰国子女クラスの国語を担当している。総勢15名（九月より編入学した三名を含む）は、海外経験も二年から九年間、日本人学校や現地校、インターナショナルスクールと多彩である。この時期は成長による差異も大きい。国語の能力にも大きな個人差があり、一人一人に全く違った対応を迫られる。やけに教室が広く感じたのは、最初の一時間だけであった。

担当は、週四時間。文法、文章表現はそれぞれ別枠で二時間ずつあるので、いわゆる読解に集中できる。ただし、単なる読解力を高めるだけではなく、不足しがちな漢字や語彙の絶対量を増やすとともに、日本の季節感や日本人的なものの見方・感じ方を学び、経験させることも、その目標としているので、それほど余裕のある時間数とはいえない。

これまで、普通クラスの授業しか担当したことがなかったため、

一回一回の授業が驚きの連続であり、自分自身の思考を見直す機会となった。また、そのたびに次の授業計画を立てなおすという試行錯誤の連続であり、長年帰国子女に国語教育をなさっている先生にご指導いただいた。

一学期は、読解の授業とはいいながら実際はその前段階に時間をかけた。普通クラスならば、予習ですませられるところだが、漢字のなりたちやその字自体が持つ意味についての学習、語彙を増強するための同義、類義、対義語の学習、さらに慣用句の意味を知り、日常的な使用を可能にするための学習に力点を置いた。

帰国子女とはいえ、一定量の漢字は書けるし、部首の名も覚えているが、それぞれの部分の担う意味や音を理解し、音訓や熟語との体系的な学習にはいたっていない。漢字が苦手な生徒は、字形を全体でしかとらえない。ゆえに彼らの書く字はバランスが悪く、同音異義や部首が共通なその他の字の学習につながらず、非常に負担となっている。彼らにとって、漢字は知識でしかない。語彙についても同様のことがいえる。

辞書を使い、一つ一つの漢字やことばを調べ、例文を読み、短文を作ることの繰り返しであった。辞書を使うことはいとわれないが、短文作りは苦勞した。辞書にあげられた例文の焼直しの域でないのである。生徒自身、自分の国語力に不安を抱いていることが如実にあらわれた長所と短所である。

ことばの学習に多くの時間を割くため、とりあげる教材の数は限られてくるが、読解力自体に大きなハンディがあるとは思えなかった。

例年、普通クラスが古典入門を学習するのにあわせて、二学期後半より古典も入門編として学習させている。私自身は、現代国語にさえ不安のある生徒に古典までもという疑問や、一層の負担を感じてしまうのではないかという危惧ももって始めた。

しかしながら、実際に開始してみると、生徒は全く新しいものとしてとらえるからか、従来の国語の授業の延長といった雰囲気ではない取り組みをみせた。

以下は、古典教材による帰国子女クラスの授業の実践報告である。

## 二、古典教材を前にして

教材として取り上げたのは、「竹取物語」と「枕草子」の、春はあけぼの・うつくしきもの・虫は・五月ばかりなどである。

入門としての中学1年時の目標は、歴史的仮名遣いをマスターし、原文の音読ができること。古文特有の言い回しになれること。古典へに興味を喚起すること。これに、古典文学の舞台となる世

界を知る——何を着て、何を食べ、どんなところに住み、どんなことをして楽しんだのか、など——を主眼とした。

新しいものに強い興味を持つのはこのクラスの特徴である。普通クラスの生徒にもその傾向は見られるが、やはり帰国子女クラスは特別なものがある。古典は彼らの目に新しいものとして映り、先に述べた潜在的な国語に対する自信の無さとは無縁の気持ちでとりくめる。一つには、中学三年間でふれさせたいと思われる古典を集めて、独自の教材を編集した別の教科書を使っていることも幸いしたのではないかと思う。彼らには新しい「知識」を得ようとする好奇心が旺盛である。しかしながら、このような好奇心というものは非常にきまぐれで、あきやすい。その点で学習意欲とは多少異なるが、この好奇心を利用しない手はないと考えた。そこで、新しい「知識」をつぎつぎと提示して、好奇心を喚起しつづけることを目指すことにした。しかしながら、何の脈絡もなく知識を示しても、その場限りの興味しか引かず、かえって彼らの学習に負担をかけることになってしまうのではないかと考えた。それにより学習効果を高めるのがねらいである以上、系統だった学習にするため、提示する新「知識」の順序を工夫することにした。

中学1年の帰国子女クラスでの授業は「飽き」との戦いである。本来ならば、導入→ことばや知識の説明→現代語訳→背景などの説明→鑑賞といったかたちが整理された学習の順序であろうが、このままでは各段階においてすぐに好奇心は色褪せる。授業計画は毎時、新しい話題を軸にするように組むことにした。

### 三、生徒とともに

#### 「竹取物語」

原文は、冒頭から生い立ちの部分と、天からの迎えが降りたち、かぐや姫が天の羽衣をきてしまう部分のみである。これらには現代語訳がついている。その間と結末部分については現代語の要約をつけている。

#### 第一次 「竹取物語」について

＊かぐや姫について各自の知っているストーリーの確認  
認

＊登場人物（とくに、五人の貴公子）の確認

それぞれの生徒におぼえているストーリーを発表させ、忘れてしまっている部分を補いあわせた。かぐや姫の話を全く知らないものは一名。ところが、貴公子の人数はまちまちで、三人から四人が最も多く、五人といったものはいない。なかには、貴公子はまったく登場しないといったものもいた。（どの生徒もしらなかったのは、石作皇子）

＊もとのストーリーのあらすじの紹介

＊平安時代の物語というものについての説明（絵巻物等の写真を見せた。）

質問が続出。なぜ、何調のものから、核心をつくものまで様々あった。

#### 第二次 原文を読む、歴史的仮名遣いについて

（範読） 1回目 音（口調）になれさせる。

2回目 表記と発音の違いに気づかせる。

3回目 原文中より、表記と発音に違いのあるものをあげさせ、そこに原則のあることを見出させる。ハ行音については簡単に発見。（普通クラスより早かった。）

（一斉読み） 一行ずつ。理解はしていても、発音についていけない生徒が割合多くみられた。普通クラスにはさほどみられないことから、日本語の発音に慣れていないせいとでもいうべきか。

（指名読み）

第三次 現代語訳をみながら、語句説明をする

帳

当時の建物、調度、暮らしぶりなど。

「帳のうちよりもいささず」の背景説明で大きく反応。

第四次 も、髪上げ

当時の女性の衣装、結婚など。（掛図、写真集を多用）

衣装の重さが話題となり、外出や風呂、睡眠についてまで質問が続出。

なづけ

「名」についての常識が現代と異なる  
点を説明。

2 時間

## 第五次 要約された部分のストーリーについて

\*五人の貴公子とその難題

簡単に紹介して終わるつもりだったが、強い興味をしめし、質問が続出したため、思いの外時間をかけることとなった。結局、毎時間続き物の紙芝居のようになってしまった。しかしながら、「かひなし」や「あへなし」から、かけことばに対する理解を得られるなど収穫もあった。

3 時間

## 第六次 天からの迎えの場面について

天女、羽衣、不死の薬

これまでの成り行きから、彼らの興味の中心となるだろうと話題を用意したが、あたらずかえって、敬語のような現段階では難解として触れないよう配慮したものに興味を示した。

2 時間

以上のように、帰国子女クラスでは、「導入」にあたる部分（\*印）に、多くの時間を費やした。古典教材を使うにあたり、もともとその必要性は感じていたが、実際これほどの時間を消費

するとは思わず、毎授業後、次の授業計画を立てなおさなければならず、定期テストまでにどれほど進めるのか予想が全くつかず（予定がたてられず）、不安になったこともある。

古典の授業を通して、それは非常に効果的であることに気付いた。現代国語の教材を扱っているときには、背景などについて確かに説明はするのだが、やはりどこかで理解できるはずといった先入観が働いてしまっていたのだろう、彼らの縦横無尽な興味や質問にとことんつきあうという姿勢がなかった。しかしながら、思いのほか、「導入」で喚起した知識欲の吸収力は強力である。時間をかけただけ、しっかりと学習したことをつなぎとめてくれる。

「竹取物語」のなかで、「導入」のひとつとして、平安時代の女性の名についての話をしたことがある。紫式部や清少納言を例にあげ、その説明の過程で、父親の清原元輔についてふれた。二ヶ月後、百人一首を行うと、その名は思い出され、「契りきなかたみに袖をしぼりつつ 末の松山 波こさじとは」は、数少ないエキサイティングな取り合いをする札の一枚となった。このことは、私にしっかりと喚起された興味は持続するということを教えた。

普通クラスでは「導入」が長すぎると、授業全体がだれる傾向にある。生徒自身がわかりきったことと思うものを提示してしまうせいかもしれないが、早く本文にはいりたがるし、「導入」の間は思考も興味も休止しているかのようなのである。全くの受け身で、まるでテレビでも見ているかのとき反応なのである。

このように、帰国子女クラスでの「導入」の効果は目を見張る

ものがあつたのだが、彼らの知識欲を満足させ、学習効果をあげようとするのは、手触りで猫の毛色を知るような心地であつた。

日本的な授業形態になれておらず、文化・生活背景などいろいろ違ふためか、私にとっては「突拍子もない」質問がとびでる。

「枕草子」の五月ばかりなどには、「蓬」の説明から、和菓子の話に発展することもある。ただか四、五年の海外生活でも日本にすんでいたならば何の意識もせずに会得したであろう生活上の知識といったものに欠落があるのだ。このような調子であるから、教材研究時に予想した彼らの興味を引くものと全く違ふこともあり、私自身の宿題がでることもある。(虫の鳴き声、星の見え方など国語を教えるための守備範囲の広さの必要を実感している。)

これまでに述べたとおり、「導入」は彼らの古典への興味を喚起するために用意したが、実際に喚起されたのは余りにも広い範囲での知識欲であり、このままでは本題に戻れない。しかしながら、わきあがる疑問を範囲外としてしりぞけると、学習意欲は一気に落ちた。時間切れで次回に持ち越せば、いったん喚起された興味もろとも跡形もなく消えてしまったこともある。その結果、中学一年ではどうても知らないような事柄にまで発展すること多いが、なるべく詳しく答えることにしている。学習はずっとさきにまでつながりのあるものであつてほしいからである。現在のところ、軌道修正は、急がず、あいまいにせず、その発端である問題を再提示することになっている。

#### 四、これから

帰国子女クラスの国語を担当して十カ月の現在、やっと普通クラスとの違い、いくつかの特色といったものが見えてきたように思われる。

- ・掛図や図表を喜び、活用して知識を得ようとする点。
- ・分量が増えるのが目に見えるタイプ知識の学習には非常に意欲的である。「枕草子」の序段の暗記は非常に積極的に取り組んだ。毎日、どこまで進んだのか確かめるのが日課になったほどである。ただし、この手の学習には意欲が先にたつていか、難な一面がある。(漢字を使わない、「とてつもない」が「とてもつない」となつても気にしないなど。)

- ・日常会話には全く不自由していかなくても、「音」、「漢字」の面で苦勞する生徒がいる。(「漢字」は得意としている生徒もあり、たんに海外滞在期間の長短による差でもないように思う。)

これらをどのようにとらえ、授業を組み立てていくのか。これからは試行錯誤の繰り返しとなるだろう。現在、特に漢字教育の方法について関心を抱いている。次に取り組むべき大きな課題と考えている。

(成蹊中学・高等学校)